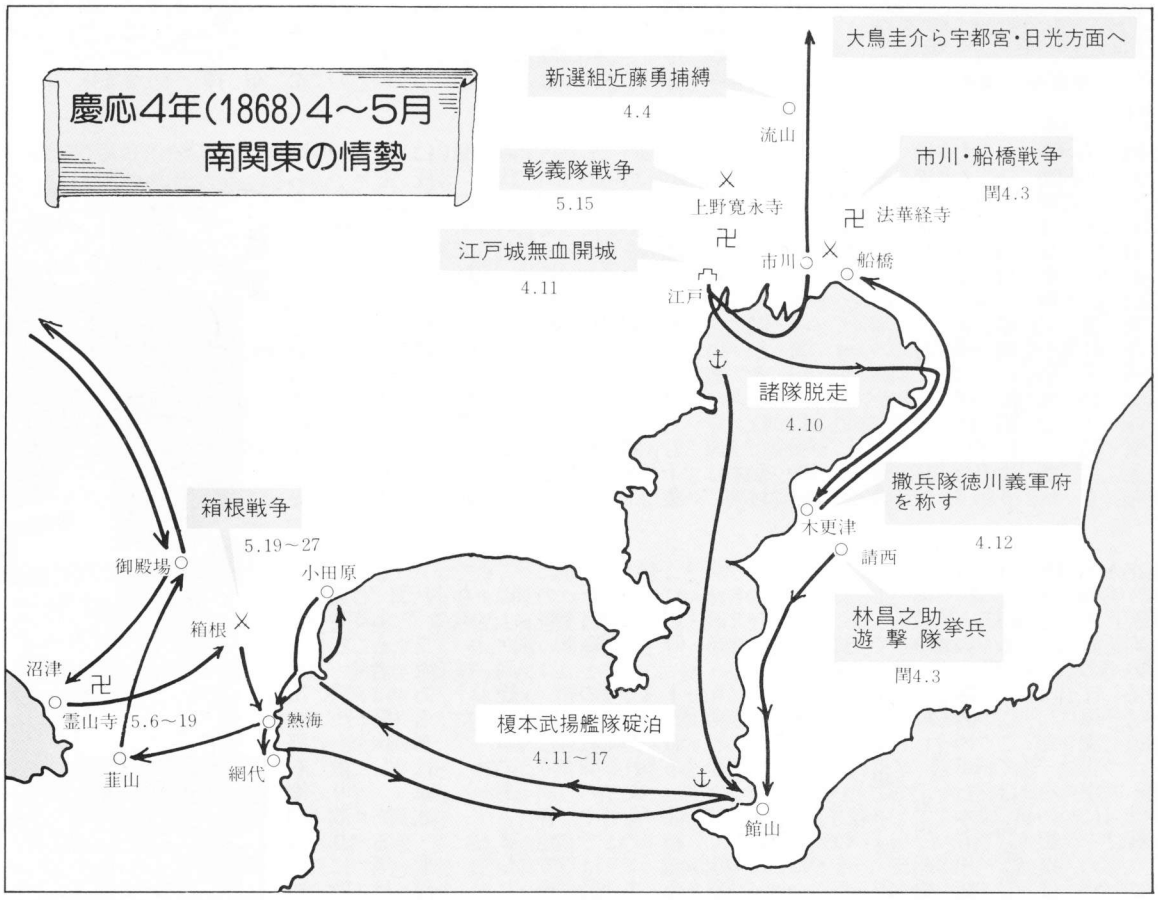
沼津市
明治史料館通信

1985.10.25（季刊 年4回発行）Vol.1　No.3 通巻第3号



江原素六とその周辺〈3〉

両総戦争

慶応四年（一八六八）一月、鳥羽・伏見の戦いに敗れ朝敵となった旧幕府徳川家に対して、官軍は征討の軍を進め、四月十一日には西郷・勝らの努力により江戸城無血開城が行われた。

しかし、旧幕臣の中には、あくまで官軍に対し徹底抗戦を唱える者も多く、彼らは江戸を脱走し、関東各地で独自に戦闘を行った。それは新選組の土方歳三や伝習隊の大鳥圭介、あるいは海軍の榎本武揚らに代表される。

江原素六も当時撤兵頭並（少佐）・撤兵隊第一大隊長として、その渦中にあった。彼個人としては、勝海舟の恭順論に賛成で、部下の軽挙妄動を戒め自ら官軍の武装解除を受けるつもりであった。しかし、江戸開城を明日に控えた四月十日夜、撤兵隊長福田八郎右衛門（江原の上官）は、隊士二千名を率いて江戸を脱走し、木更津を占拠し、そこで「徳川義軍府」と称した。江原も止むを得ず部下の後を追って脱走軍に身を投じたのであった。

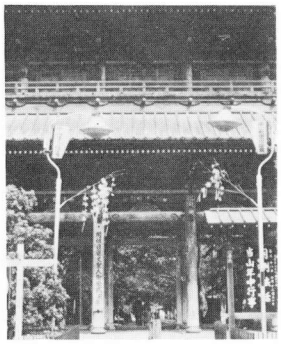
本営を真里谷に移した徳川義軍府

（撤兵隊）は、上総・下総の小藩に圧力をかけ、勢力の拡大をはかった。一方、第一・第二・第三大隊を市川・船橋・姉ヶ崎まで北上させ、江戸を衝く動きを示した。

江原は、第一大隊三百名を指揮し、四月二十九日に法華経寺に布陣した。対官軍の最前線であった。

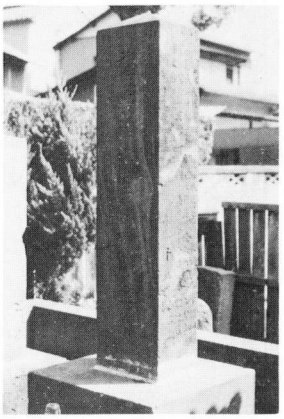
備前・福岡・佐土原・津などの藩兵から成る官軍側がこれに対峙し、戦闘準備の一方で両者の間では和平交渉が続けられた。しかしこの交渉は決裂に終った。

閏四月三日、江原の第一大隊は八幡駐屯の官軍を急襲し、ついに戦闘が開始されたのであった。この日の戦いは、市川と船橋を中心に行われたので、市川・船橋戦争と言われる。


法華経寺（千葉県市川市）

当初、江原軍は善戦し市川を占領するほどで、江原自身も、官軍から奪った大砲を自ら操作するといった奮戦ぶりであった。

しかし、やがて盛り返した官軍に圧倒され、結局敗走する。この間、江原は敵の兵士と格闘し、組み伏せられ、危いところを部下の古川宣誉に救われるといったこともあった。この時、江原と格闘し古川に倒された敵兵士（福岡藩士小室弥四郎）の墓は、今でも千葉県船橋市に残っている。江原は、この直後に貫通銃創を受け、動けなくなり、戦線を離脱、以後約一ヶ月間農家にかくまわれた。五月に密かに江戸へ帰ったが、官軍の探索が厳しく、八月に駿河に移住するまで点々と各所に潜伏した。


小室弥四郎の墓
（千葉県船橋市海神
明治19年千葉県建立）

一方、市川・船橋の敗戦により撤兵隊は全面撤退を余儀なくされ、閏四月七日には五井・姉ヶ崎でも敗れ、八日には真里谷の本営も陥落した。福田八郎右衛門は何処かへ遁走し、兵士も散り散りに敗走し、ある者は降伏し、ある者は殺され、またある者は東北・北海道でも戦い続けた。

以上が両総戦争のあらましだが、この戦いは、同じ時期各地で頻発した官軍との小戦闘の中では最も江戸の近くで戦われたものであり、これ以降、上野戦争・北越戦争・会津戦争・箱館戦争と続く戊辰戦争のひとつに位置づけられる。

なお、この戦いの呼び方については、従来決った言い方はなかったようで、『市川市史』では「市川船橋戦争」と称し、『市川・船橋戦争』という題名の単行本も出版されているが、ここでは「両総戦争」と呼ぶことにした。その根拠は、当館所蔵の江原文書中にその呼び名が見られることと、実際この戦争は、市川・船橋で戦われただけではなく、広く上総・下総の各所で戦闘があったからである。

両総戦争を描いた綿絵
―姉ヶ崎での戦闘
（『錦絵幕末明治の歴史』4
講談社より）

〈参考文献〉『江原素六先生伝』・『木更津市史』・『市川市史』・山形紘『市川・船橋戦争―幕府陸軍撤兵隊始末―』

撤兵隊戦死者梶塚成志墓誌拓本
江原素六と大鳥圭介の書になる

ぬまづ近代史点描②

遊撃隊と常整隊

撤兵隊の両総戦争は、海を越えて沼津とその近辺にも飛び火した。

撤兵隊（徳川義軍府）が協力を申し入れた房総半島の諸小藩のひとつに請西藩（現千葉県木更津市内）があった。撤兵隊だけではなく、遊撃隊（やはり脱走した旧幕府諸隊のひとつ）も、請西藩に対して決起を促した。

若干二十一歳の請西藩主林昌之助忠崇は、旧墓臣たちの徳川家再興に賭ける熱意に打たれ、ついに慶応四年（一八六六）閏四月三日、挙兵を決意し、請西を出陣した。林以下の請西藩士と伊庭八郎・人見勝太郎（寧）らの遊撃隊その他から成るこの軍勢は、「上総義軍」と称し、房総半島を南へ進撃し、十二月には、館山から船に乗り対岸の真鶴に上陸した。

林昌之助

以後、彼らは、小田原藩や韮山代官所に同盟を求めたが入れられず、甲府へ攻め込もうと御殿場経由で甲州へ向ったが、山岡鉄太郎や沼津藩に説得され、沼津在香貫村の霊山寺で謹慎することになった（五月五日）。ところが、同月十九日には霊山寺を脱走し、沼津に滞在していた官軍の軍監を襲撃し、再び戦闘を開始する。

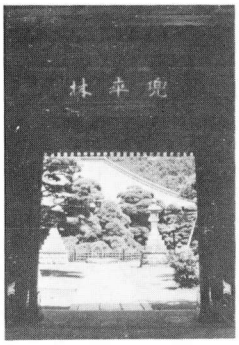
沼津を出た遊撃隊は、二十日箱根関所を奪い、小田原藩を味方に引き入れることに成功した。しかし、その後小田原藩は再び官軍へ寝返り、二十六日から両軍の間で戦闘が行われた結果、衆寡敵せず遊撃隊は箱根を追い落され、熱海へ逃げ込み、そこで榎本艦隊の軍艦に拾われたのであった。

伊庭八郎奮戦の図
（鈴川憲二氏寄贈）

これより以前、沼津藩水野家は、既に二月の時点で勤王証書を提出し、官軍に忠誠を誓っていた。そのため、藩主水野忠敬は甲府城代に任命され、三月より藩兵を率い甲州警備の任にあたっていた。

その際、沼津藩は、手薄になった沼津城の守備のため「非常組」という一種の農兵を募り、城門の警固などにあたらせた。

遊撃隊の霊山寺滞在中は、非常組の警備も特に厳重で、「東関門ニハ昼夜四人ツヽ、交代シテ往来ヲ警備ス夜ニ入レハ十名ツヽ、隊伍ヲ組テ市中ヲ警戒ス」と当時非常組の一員だった鈴木亮平（岡宮村の豪農で後に金岡村長になった）は回想している。



霊山寺

非常組の服装は、「黒手絽ノ羽織ニ唐機ノ裁付韮山笠ヲ被り一刀ヲ帯シ鉄砲ヲ携帯」していた。

遊撃隊騒動もおさまり、藩主も甲府より帰城した際には、非常組に対して慰労のための酒肴を賜ったという。隊士たちはそれぞれの村へ帰ったが、その後も非常組は「常整隊」と改称されて存続し、村毎で藩士たちから訓練をうけた。

岡宮の光長寺の境内はその練兵場にあてられ、江川太郎左衛門に砲術を学んだという高木安之助なる藩士が教官として訓練を行ったという。

なお、岡一色・岡宮・東熊堂・西熊堂の四村では、岡一色―野秋直作以下十名、岡宮―杉山仙右衛門以下十三名、東熊堂―清吾平以下八名、西熊堂―山田源太郎以下八名、合計三十八名の農民が常整隊員となっている。

やがて、水野藩の菊間転封、徳川家の駿河入部により、常整隊は自然消滅したようである。

〈参考文献〉『沼津市誌』・『熱海市誌』・『沼津史談』1・21・23号・『金岡村誌』・鈴木亮平手記ほか。

お知らせ欄

◎企画展「間宮喜十郎展」好評開催中。

来年一月七日までですので、是非一度御来館下さい。

◎歴史講座「沼津兵学校」始まる。

10月6日から歴史講座「沼津兵学校」が始まりました。

第一回目は、軍事史研究家所荘吉氏を東京よりお招きして、「日本近代化における沼津兵学校の位置づけ」というテーマでお話しいただきました。

御専門の洋学史・軍事史・銃砲史などの立場から、沼津兵学校について広い視野、高い視点で説明された所先生のお話は、具体的で大変わかりやすく、受講生も熱心に聴き入っていました。

引き続き、四方一瀰先生、土屋重朗先生、田村貞雄先生、辻真澄先生の講演も行われます。

◎明治史料館古文書会が発足。

9月28日、当館古文書解読入門講座のOBが中心となって、「明治史料館古文書会」が結成され、今後も自主的に古文書の解読を勉強していくことになりました。

●会長井出貞一氏・副会長松浦正美氏

●毎月第3土曜日、午後1時30分～3時30分、於明治史料館

●会費年間二〇〇〇円

これからも会員を募集します。多くの皆様の参加を希望致します。あなたも古文書を楽しく勉強しませんか？

◎オープンから一周年、多くの皆様より資料の提供を受けました。

10月1日で開館一周年を迎えましたが、この間多くの皆様から貴重な資料を寄贈・寄託していただきました。心より御礼申し上げます。

〈資料寄贈者〉東沢田自治会・山田茂（西熊堂）・江原有信（東京都）・鈴川憲二（上土町）・斎藤芳雄（市場町）・森田達（東京都）・村田喜作（西間門）・江原素六先生顕彰会・田中喜三郎（東間門）・原達郎（静岡市）・後藤文弥（本田町）・芹沢正久（西沢田）・間宮恒夫（横浜市）・野田定（寿町）・荻生田鶴子（東京都）・渡辺千春（千本常盤町）・居山健四郎（西後町）・加藤真久（千本）・上原栄（西熊堂）・浦辺諦善（岡宮）・鈴木光峰（白銀町）・庄司俊一（原）・後藤均（東京都）・大築志夫（鎌倉市）　敬称略

〈資料寄託者〉池谷政治（山王台）・海瀬治（西浦河内）・山田春男（西条町）・川口泰雄（鳥谷）・江藤昭二（横浜市）・鈴木正二（岡宮）・野村康夫（西浦立保）・森修彦（石川）・阪東英雄（魚町）・間宮恒夫（横浜市）・岡宮自治会・後藤寿雄（西沢田）・井上章久（末広町）　敬称略

当館では今後も資料収集活動を行っていきます。市民の皆様の御協力をお願い申し上げます。

沼津市明治史料館通信　第3号
編集　発行　沼津市明治史料館
〒410 沼津市西熊堂372―1
☎〇五五九(23)三三三五